



Title	柳宗悦の佛教美学
Author(s)	猪谷, 聡
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 42-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

柳宗悦の佛教美学

二〇一三年一〇月、柳宗悦『(一八八九―一九六二)の未公開原稿(日本民藝館所蔵) 全文が雑誌『民藝』七三〇号に掲載され、またその直筆原稿が鈴木大拙館(石川県金沢市)にて公開された。原稿には標題がなく、正確な執筆年代も不明であるが、「原稿内容から判断して一九五〇年代はじめ」と推測されている^{『2』}。一九五〇年代、著作『美の法門』を端緒として、民藝思想は「佛教美学」へと形成されていく過程にあった。端的に言えば、柳の思想および民藝運動^{『3』}の転換期であった。

原稿文中にはおよその時期を特定できる語^{『4』}が見られ、そうした語のひとつに「国際工藝家会議」がある。

ここで私は、今回歐米を旅して来た経験から二三のことを報告したい。大体私の今回の外遊は国際工藝家会議に出席するためであったが、工藝の諸問題のうち最も根本をなす美の問題を取扱うのが私の使命であった。^{『5』}

一九五二年七月イギリス・デボン州にて、ダーティントン国際工芸家会議が開催された。十日間にわたって工芸の将来について語り合った会議には、陶芸・染織の実作者をはじめ、「学者や評論家や美術館員や工芸関係の実業家や指導員」^{『6』}、また支援者など二十カ国近くの人々が約百五〇名集った。工芸運動史上においても画期的な出来事であったが、会議のディレクターのひとりであったバーナード・リーチ(一八八七―一九七九)に請われ、日本からは、柳および濱田庄司(一八九四―一九七八)が出席した。柳は講演を行い、濱田は陶芸の実演を行った。この年、柳は濱田、志賀直哉(一八八三―一九七二)とヨーロッパをめぐっており、また会議の出席後、濱田とリーチの三人でアメリカを訪れている。原稿にある「国際工藝家会議」とはその会議を指す。

本論文では、ダーティントン国際工芸家会議における講演、そして講演後に執筆されたと思われる原稿(「佛教を説く道」)に着目しながら、一九五〇年代はじめの柳の問題意識を探ることを試みたい。原稿には「美の世界を介して佛法を説くのが私の眼目」という表現がある。そのことから鑑みても、仏教への関心が高い時期に書かれたものといえよう。問題意識の動向から、民藝運動の指導者としての姿勢が確認できると筆者は考える。また、その確認によって、現在における民藝、工藝を捉え直す視点を得られるのではないか。これが本論文のねらいである。

民藝の美を仏教的に語ることがはたして有効なのか。

『美の法門』

一九四八年、柳は「大無量寿経」第四願から着想を得た考えに基づき『美の法門』を著した。「無有好醜」という、相対的な好醜、いわば美醜を超えた「美」についての考えを柳は示している。同年に日本民藝協会第二回全国協議会において発表され、運動同人にもひろく伝えられ、柳自身の存在と相俟って多大な影響を与えたという。翌年の一九四六年『美の法門』（私家版）が刊行された。後に、『無有好醜の願』（私家版、一九五七年）、『法と美』（私家版、一九六一年）『美の浄土』（私家版、一九六二年）とあわせ、柳のいう「佛教美学」シリーズへと繋がっている。

柳の思想上の流れ、または民藝運動の流れにおいて、仏教に対する関心、とりわけ浄土思想に対する関心は以前からあったが、相対を超えた「美」という考えを、『美の法門』において「佛教美学」の根本として明示しているから、柳は一九五〇年代を通じて、「美」についての考えを深めていったといえよう。では、そうした考えを仏教的に語ることを柳はどのように捉えていたのか。『美の法門』の後記から探っていきたい。

かつて一途に宗教的真理を追っていた私が、中途にして美の問題に触れ、特に工芸を対象とし、更に民藝館の設立に心を注いだ時、幾人かの人々から、何故宗教の世界を去って、形而下の問題を対象に、日夜を送るのかといて詰られたことがある。この問いは一再ならず私に加えられた。早く再び宗教の問題に戻ってはどうかという忠告である。（近頃私を知った人々は、逆にかけて私が宗教に心を寄せたことに奇異な想いを抱くのである。）しかし私として見れば、一つの頂きを異る面から見つめていたのであって、「実は同じ仕事をしているのである」と答えるより致方なかったのである。^{〔7〕}

柳によれば、自身は一貫して宗教的な関心を有していた。「美の問題」もまた宗教的な関心と結びついたもので

あった。しかし、そうした自身の考えが必ずしも理解されてきたわけではない、と柳はみている。いわば宗教哲学者として柳をみる人々から「早く再び宗教の問題に戻ってはどうかという忠告」を度々受けていたことを明かすのは、ある種のもどかしさの吐露なのかもしれない。

一方で、民藝運動の提唱者として柳をみる人々、つまり「近頃私を知った人々」は、かつて柳が宗教的な関心をもっていたと思い込み、それを「奇異」と捉えている、と柳はいう。民藝という語が一般に普及し、各地で民藝協会が結成された一九四〇年代、運動の成果は各地で現れており、運動を牽引してきた立場にいた柳は手応えを感じていたとしても不思議ではないだろう。しかしながら、運動を進めていく中で周囲から投げかけられたであろう意見や批判があったことがこの箇所からうかがわれる。そして、柳が考える「民藝」が充分には理解されてきたわけではなかった、と柳がみなしていることが読み取れる。

従来から宗教的な関心を抱いてきた柳にとって、自身の関心が宗教的なものから民藝・工芸といった、いわば造形上の関心へと移行したわけでも、ましてや、造形上の関心から宗教的な関心へと転換したわけでもなかった。「実は同じ仕事をしているのだ」と零しているのは、軌を一にする関心において取り組んできたと示すためであろう。

美を宗教上の問題とする見解は独創的でも革新的というわけでもない。だが、柳がこのことを明確に述べたとき、柳にはある明確な問題意識があったであろうし、またその問題意識があつて初めて、柳のいう「美」を民藝運動において宗教的に語ることが省みているだろう。民藝の美を仏教的に語ることがはたして有効なのか。柳はその問題を意識していたのではないか。自身の関心が民藝から宗教的なものへと転換したと判じられる可能性を危惧しながら、柳は民藝をいかに語るかを探求しているようだ。

民藝とは何かを語り、運動の方針を示す、とりわけつくり手たちを指導する立場にいた柳は、民藝の美こそが相対を超える「美」だという考えを確固として持ちながら、ここにおいては、「実は同じ仕事」だと説くことを「致し方なかった」と表現している。それは明瞭に主張する姿勢とは異なる。

後年にみられる、佛教美学を打ち立てんと意欲的に「美」を説く姿勢への過程を辿る上で、次節では国際工芸家会議での講演をみてみる。

ダーティントン国際工芸家会議の講演

国際工芸家会議が、西洋のつくり手たちに向けて語る場であったことは、注目すべき点である。会議では、工芸における実作上の問題、または教育上の問題等が議題として挙げられた。柳は講演を三度行ったが、会議の報告書には概ねその記録が残されており、いずれの講演においても「美の問題」を扱っていることが分かる。

会議の中心人物であるリーチは、当初から会議全体テーマのひとつとして西洋における東洋の紹介を意図していた。リーチは自身の講演において、柳が日本の工芸運動において果たした役割を紹介しながら、西洋における工芸の展開には東洋、とりわけ日本との交流が必要であると打ち出す。東洋からの出席者は柳と濱田のわずか2名であったから、講演を担った柳は重要な位置に置かれていたであろう。

この会議における東洋および西洋が何を指していたのかは問題ではあるが、ここでは問わないこととしよう。ともかく東洋の紹介とは、例えば東洋における美術史、工芸史、あるいは思想史を説き明かすことではなかったようだ。数少ない東洋からの参加者のひとりとして、柳は、一九五〇年代当時の自身の思想と民藝運動の流れにおいて、まさに取り組んでいる最中の問題を取り上げながら、東洋からみた西洋への視点を示そうとした。

老子のことば（『道徳経』十八章）から始まる、「The Japanese approach to the crafts」と題された一つめの講演は、工芸のつくり手である「個人作家」という制約から解放されたものづくりのあり方を扱っている。民藝運動においても繰り返し語られてきた個人作家と工人との関係につながる問題である。

特に、柳が仏教的な考えを語ったのは二つめの講演「Buddhist Idea of beauty」においてである。キリスト教と仏教との違いを初めに示しながら、禅および真宗を紹介するこの講演において、東洋文化に馴染みがない聴衆に伝えるための工夫であろうか、簡明な文例を用いて、仏教の説話、特に禅の説話を英語で語りながら、『美の法門』において示された考え、すなわち美醜をはじめとする相対を超えるあり方を表現する。そして朝鮮の焼物などを例に、二元の

美に囚われない現れを具体的に提示する。それは西欧的なものとは異なる美学の構想を含んだ内容であるが、美の問題を宗教的に、仏教的に語る立場を柳は見せている。

またこの講演において、相対を超えるあり方を西欧の工芸家たちに伝えるにあたって、柳が「不二」「只麼（しも）」「如」などの仏教用語を随所に用いた点は興味深い。英語世界において、二元性に囚われない考えをそもそも英語によって伝えるという課題を抱えた上に、単純に解説し難いことばを取り挙げて語り伝える方法を柳は採っている。こうした方法によって「美」を仏教的に説く試みを行ったのが、この講演の特徴といえよう。講演を終えた後の柳の想いは三つめの講演において語られている。

柳の疑問

会議全体を通しての感想を中心とする三つめの講演において柳は、参加者の講演や議論から多くを学び感銘を受けたことを述べつつ、なぜ美について誰も言及しなかったのか、という疑問を提示している。

柳が伝えようとした見解は、ふたつめの講演にて既に語られている。相対を超えるあり方を示す柳は、東洋と西洋とが相対するものではないし、東洋的でありながら東洋ではないもの、そこに西洋のものとを包括するような一つのものがある可能性を示そうとする。日本および東洋の文化や思想を西欧世界へ紹介するだけでなく、東洋・西洋という相対を超える柳の姿勢は、民藝に対する考えにも通じるだろう。「佛教美学」の構想は、単に日本における工芸上の関心に留まっているわけではない。民藝とは東洋・西洋という図式におさまらないダイナミズムを孕んだものである。

柳は仏教的に「美」を説き、そして、工芸において美の問題はもっとも根本的であると主張した。残念ながら美の問題が議論の俎上に乗ることはなかったと柳は判断している。確かに講演記録をみるかぎり、柳の投げかけた問題が議論された跡は見当たらない。このことは柳の問題意識にどのような影響を与えたのだろうか。

さらに、柳はほとんど議論されることのなかった問題として「凡庸なつくり手をいかにすべきか」という疑問も提示している。それは、柳がひとつめの講演で取り上げた問題でもあり、民藝運動を進めていく中で直面していた問題でもあった。柳の民藝理論において、理想とするものづくりを体現する人々は個人作家ではなく工人であったから、この問題に対する意見を西欧のつくり手から聴いてみたいという望みを持っていたのかもしれないが、いずれにせよ、こうした疑問は、解消されることのなかった柳の問題意識をより浮かび上がらせている。

「美」を仏教的にいかに説こうとしたのかを深く捉えるため、原稿「佛教を説く道」から考察してみたい。後述するように、柳は決して意欲を失っているわけではないからである。

「佛教を説く道」

国際工芸家会議の後に執筆されたであろう直筆原稿は、全一四頁に渡っており、いずれの頁にも柳自身による訂正の跡が残る。標題がない原稿冒頭は「コロンビア大学に近いバトラー・ホールに大拙先生は寄寓しておられた」から始まっている。

「大拙先生」、すなわち鈴木大拙（一八七〇—一九六六）は、コロンビア大学にて一九五一年より一九五七年頃まで講義を行った。原稿には柳が実際に大拙を訪れたことが書かれている。柳は、「国際工芸家会議」の後、約三ヵ月間、濱田、リーチとアメリカに滞在していたが、大拙と会った時期はその頃と推測される^{『3』}。

「大拙先生」「先生」または「鈴木先生」が原稿の前半に頻出し、柳からみた大拙にかんずる記述が前半の大半を占める。両者のつながりは、一九〇九年（大拙三九歳、柳二〇歳）の頃に遡る。柳は、学習院高等科において英語を大拙に学んだことが機縁となり、個人的にというだけでなく思想上においても大拙と交わり、とりわけ、一九四〇年代半ばから深くかわるようになった。両者の緊密なつながりに加えて、柳を基点として、リーチや濱田といった、民藝にかかわる人々と豊かな交友関係が形成されている。また仏教研究では、大拙に導かれ柳もまた、禅だけにとどまら

ず浄土思想にまでわたって、とりわけ妙好人を共通の課題として、精力的に取り組んでいる。両者のつながりは柳が先に亡くなるまで続いた^{『4』}。

大拙は一九四九年から、アメリカを中心とする講義・講演活動に入っており、柳は大拙のそうした活動もよく知っていた。柳と大拙との関係を概観するにあたり、柳が大拙について述べている箇所を取り上げよう。

全世界における禅への関心の今日の興揚は、偏に先生の力に依るのである。先日モハワイのホノルルで世界哲学者大会があった時、各国から集まった総ての大学者たちよりも、一番先生の講演が人気を集め、聴衆が堂の外にもあふれたという話を耳にしたが、私共にとつては先生を介して東洋が輝き始め、また仏教が正しく伝わり始めた事は、何としても有難いことに思われてならぬ。日本はもう世界に何かの贈り物をすべき時に来てはいまいか。ただ、それには東洋人としての自覚が何より肝要なのである。この自覚を最も大きくまた深く、持たれているのが、大拙先生だと私には思われてならぬ。そうして、この自覚こそは、長年に亘る先生は一切の仕事の基礎をなしているのだと言えよう。^{『5』}

この文には柳の「大拙」評が含まれているが、原稿においてみられる「大拙先生」にかんずる記述内容と重なるところは多い^{『6』}。例えば、西洋にて「大拙先生の講義が悦ばれている」と柳が表現するように、大拙が東洋思想を西洋に伝えている点、そして欧米人が東洋思想を受け入れている点である。さらに、一般的に禅思想が「西洋人には分りにくい」と思われるなかで、大拙が「禅の存在を欧米人に知らしめ」ている功績を柳は重視している。

そうした東洋思想に関心を抱いているのが、学者よりも芸術家であると柳はみていた。実際に大拙のコロンビア大学の講義を聴いたジョン・ケージ（一九二二—一九九二）をはじめ、様々な芸術家が大拙に影響を受けたが、柳自身が経験したのであろう、原稿には「芸術家たちの方が、分りが早い」という表現がみられる。国際工芸家会議での経験を通じて得たものかもしれない。

柳からみれば、大拙は西洋で東洋思想ととりわけ禅思想の関心を惹き起こすことを成し遂げており、しかも芸術家に

「美の世界を介して」仏教を説く有効性を確信したからこそ、
最晩年までその意欲を維持し、
「佛教美学」の構築を進めることができたのだ。

影響を与えた先駆者であった。柳は自身が「美」を仏教的に説く姿を大拙に見出したとするには想像に難くない。

興味深いのは、原稿には国際工芸家会議での講演で用いた「只麼」「如」「不二」などのことが並んでいることである。「只麼」をはじめとするそうしたことを柳は「きわめて東洋風なものであって、それらの思想こそは将来の西洋思想に大に寄与する」と捉えている。そうしたことをばを取り上げて語った方法を選んだ理由となるだろう。また後に、柳は英語でどのように伝えるべきか、「如」などの英訳を大拙に尋ねてもいる¹²⁾。日本および東洋の文化や思想を西欧世界へ伝えんとする意識とその方法に、柳は関心を持ち続けたのだろう。

原稿の後半では、柳は欧米経験を通じて、「工芸の諸問題のうち最も根本をなす美の問題を取扱うのが私の使命であった」と述べている。原稿からは、柳がどの箇所を削除し、また何を残そうとしたのかが明らかとされ、印刷刊行されては知ることが出来ない柳の思索の過程を辿ることができる。柳は、「美の問題を取扱うのが私の使命」と述べているが、元は「任務」とあった箇所を柳が「使命」へと訂正した跡がある。「使命」の表記を単に思い付いて選んだわけではあるまい。柳の著作において、「使命」という表記には明確な意識が反映されている例がみられるから、その表記には柳の強い気概が込められていることが分かる¹³⁾。

ここにおいて確認すべきは、国際工芸家会議を含む欧米体験によって、柳は仏教に対する関心、それ以上に、仏教を説く意欲が一層強まっていることである。

欧米での講演の際、柳は「予期もしなかったほどの称讃」を受けたと述べている。自身の行ってきた講演を振り返り、仏教をただ仏教として説いても受け入れられなかったが、「一旦純宗教を離れて、美の世界を介して」説くことで受け入れられたのだ、と柳はいう。「美」を仏教的にいかに説くかという問題が、自身の経験によって解消された姿が現れている。「美」を仏教的に説く、いや、「美の世界を介して」仏教を説く有効性を確信したからこそ、最晩年までその意欲を維持し、「佛教美学」の構築を進めることができたのだ。

おわりに

柳の意に反し、柳の関心が移行したと捉え「奇異な想い」を抱いた人々がいると柳は述べたが、民藝から宗教へと関心が転換したのだと、柳を捉える人々もいたであろうし、いまなおあるのかも知れない。

そう捉えるならば、「佛教美学」における柳の語りから、工芸のつくり手たちにとって、造形上の方策を具体的に見出すことは難しいだろう。しかしながら、仏教をただ仏教として説いても受け取られ難いとして「一旦純宗教を離れて、美の世界を介し」説く考えを柳は提示している。その考えは、民藝を伝える、または受け継ぐことにおいても適う。民藝をただ民藝として語るのではなく、一旦は別離し「美」を仲立ちとする。多義性を過分に帯びた民藝・工芸を改めて捉え直す視点は、その考えを受け取るころから得られるのではないか。

猪谷聡（いのたに・さとし）

公益財団法人金沢文化振興財団・鈴木大拙館学芸員。

註

*1 柳宗悦（本名むねよし、「そうえつ」とも呼称）若くして『白樺』の创刊に携わり、ウィリアム・ブレイクを日本で初めて本格的に紹介、また木喰上人研究など実に多彩な才能を発揮してきた柳は、やがて民藝美論と民藝運動によって画期的な仕事を成した。「民藝」を提唱し、日本民藝館の創設者として国内外において広く知られる柳は、そればかりでなく、『宗教とその真理』『南無阿弥陀仏』など、宗教哲学者として大きな業績を残している。

*2 未公開原稿の全文は、雑誌『民藝』七三〇号（二〇一三年一月号）に掲載。標題がないため、『民藝』編集部によって、執筆時期は一九五〇年代はじめと推測され、原稿文中から引用されたことから「佛教を説く道」が題として与えられている。直筆原稿は鈴木大拙館（石川県金沢市）にて開催された企画展「大拙と柳宗悦」（二〇一三年一〇月二日―十二月一日）にて初公開となった。大拙と柳の書・著作を中心とする内容において、両者のつながりと共通の思想的な根底を持っていたことを示す一例として展示。

*3 一九二六年より始まった民藝運動は、一九三四年に日本民藝協会設立、当初の目標であった「民藝美術館」を一九三六年に実現させ、東京・駒場

*4 日本民藝館を設立した。一九四〇年代の後半から、各地で民藝協会の発足、民藝館の開館が相次ぐなど、全国的な運動展開の隆盛が始まった。その他の語としては「国際哲学者会議」がある。原稿文中では「先生ハワイで国際哲学者会議があった時も、先生の講演は最も人気があったというが、…」と書かれている。「先生」、すなわち鈴木大拙は一九四九年六月、ハワイ大学にて第二回東西哲学者大会に出席、また一九五九年六月にも同じハワイ大学にて第三回東西哲学者大会に出席した。「国際哲学者会議」は第二回東西哲学者大会と思われる。

*5 前掲書、六―七頁、引用。

*6 柳宗悦「国際工藝家会議」『毎日新聞』（昭和二十七年八月二日）より引用。なお、会議の全容、参加者の講演については、藤田治彦監修『ダーティントン 国際工芸家会議報告書―陶芸と染織一九五二年』（思文閣出版、二〇〇三年）参照。

*7 柳宗悦『美の法門』一九四九年「柳宗悦全集第一八巻」二四―二五頁、引用。

*8 柳によれば、一九五二年十月のアメリカ滞在中、大拙とは三度会ったという。柳宗悦先生を訪ねて「一九五三年」柳宗悦全集第一四巻四七三頁参照。柳が亡くなる前年、一九六〇年に行われた柳と大拙との対談にて、柳は、「東洋の美の深さを知らせる新しい美学が起こるべきだと思います。」と大拙に語っている。両者は共通の関心をもって互いに考えを深め合う様子がうかがわれる。鈴木大拙「禪者と妙好人について」『鈴木大拙坐談集第二巻』（読売新聞社、一九七一年）参照。

*10 柳宗悦「かけがへのない人」一九五九年「柳宗悦全集第一四巻」四八三頁、引用。なお、大拙が柳を評した一文を挙げたい。一九六一年、柳に先立たれた九〇歳の大拙が柳の告別式において述べたものである。大拙は柳を「天才の人」と評している。「君は天才の人であった、独創の目に富んでいた。それはこの民藝館の形の上でのみ見るべきでない。日本は大なる東洋的「美の法門」の開拓者を失った。これは日本だけの損失でない。実に世界的なものがある。まだまだ生きていて、大成されることを期待したのであったが、世の中は、そう思うようには行かぬ。」

*11 柳の「佛教と歐米思想」（一九五二年三月）、「先生を訪ねて」においても大拙評が述べられており、大拙が西洋において仏教、とりわけ禪を伝える業績を讃えるなど、「佛教を説く道」との内容の共通点がみられる。

*12 鈴木大拙「東洋と西洋」『鈴木大拙坐談集第二巻』（読売新聞社、一九七一年）参照。

*13 たとえば「民芸運動は何を寄与したか」の一文がある。この文章が掲載された、一九四六年の雑誌『工藝』百十五号と一九四八年刊行の単行本『民と美・下巻』との用語変化を比較検討すると、「仕事」から「使命」へと変化した例がみられる。文中の用語変化は「使命」以外にもなされており、柳の明確な意図によって語が選択されたといえよう。引用文の傍線は筆者による。

「現在の實用工芸の衰頹を救うためには、作家と職人との協同作業が望ましいのである。ここに又個人作家の新しい仕事がある。作家は寧ろ職人の中に自己の仕事を見出さねばならぬ。」「工藝」百十五号（一九四六年）。

「現在の實用工芸の衰頹を救うためには、作家と職人との協同作業が最も望ましいのである。ここに個人作家の新しい使命があると思われる。作家は寧ろ職人の中に自己の仕事を完成させねばならぬ。」「民と美・下巻」（一九四八年）。

なお、一九五四年に改めて「民藝運動は何を寄与したか」が刊行された際も「使命」をはじめ、語の変更は残されている。

第二章

デザインの言葉たち